

「低くする者は高くされる」(ルカによる福音書一四章七〜一四節)

1 婚宴に招待されたら

今日の箇所も、いまお読みしてお分かりのように、イエスが大勢の人と食卓についていたときの話です。

いま〈今日の箇所も〉と言いましたが、先週私どもが読んだ、〈安息日の食事〉がじつはまだつづいているのです。

ついでに申し上げれば、この同じ食事の時のイエスの教えをルカは、もう一つ書いています。次の段落(一五〜二四節)です。ですから同じ食卓でのことが、三つ書いてあるというわけです。そこで〈いやし〉がなされ(一〜六節)、そこで〈教え〉が説かれます(七〜二四節)。都エルサレムに向かうイエスはこうして変わらずにその働きをつづけているのです。

〈安息日の食事〉のことを、今日も、もう一度確認しておいたほうがいいかも知れません。安息日です。その日の特別の食事です。先週少し申し上げましたが、ふだんとは違う食事として重んじられていました。ここにあるように、会堂の礼拝に参加した人たちが、招待されて同じ食卓を囲む、ちようど教会の〈愛餐会〉のようなものを想像しますが、どうでしょうか。この日、〈安息日の食事〉を催した人(ホスト)は「ファリサイ派のある議員」(一節)でした。「議員」とは最高法院の議員です。相対身分の高い人です。

そしてこの人がファリサイ派の人であったことから、食卓には、同じファリサイ派の人々、加えて律法の専門家も招待されていました。それ以外の「人々」(二節)もいたことは確かです。弟子たちへの言及はありません。いずれにしてもファリサイ派と律法学者がイエスと同じ食卓を囲んでいたことは、今日の箇所を読む上でも忘れてなりません。

さて今日の箇所、全体は二つに分けられます。七節〜一一節までが前半、一二〜一四節が後半です。全体はイエスの言葉からなっています。前半部分は、招待客、しかも上席を選んで座っている招待客に向けて語られています。これに対し後半は、この食事を催した人に向けて語られています。前半は何人か複数の人に語られています。後半は個人です。

はじめに前半です。イエスは、招待を受けた人で、上席を選び、座ろうとしていた人たちに、「たとえ」でこう話されたとあります。

婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、あなたやその人を招いた人が来て、「この方に席を譲ってください」と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかって末席に着くことになる。招待を受けたら、むしろ末席に行つて座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、「さあ、もっと上席に進んでください」と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。だれでも、高ぶる者は低くされ、へ

りくだる者は高められる(七〇一節)。

上席を選んで座ろうとしている人たちとは、いうまでもなくファリサイ派、律法学者たちのことです。ルカの他の箇所には、長い衣を着て歩き回りがり、広場で挨拶を受けることを喜び、会堂でも上席を好むとか、彼らの日常の姿が色々描かれています(一一・四三、二〇・四六他)。

こうした彼らについて、イエスでなくても、おかしい、みにくいと思いつつも、宗教的な権威をもった人たちなので、一般の民衆は、陰口は仮に言ったとしても、何も言えなかったでしょう。

ですから、イエスがここで言っているように、婚宴の席で、後からもつとえらい人が来て、席の移動を求められたら、恥ずかしい話だ、それならはじめから末席に座っていたら、そんなことはないし、それどころか、かえって、謙遜だと思われて、上席を与えられ、面目を施すことになることもあるだろう、というのは、一種の皮肉にも聞こえます。少なくとも、こうした言葉で、イエスが、真剣に、何かアドバイスをしている、彼らに知恵をさずけているというようなことでないのは、いうまでもありません。

ルカは、これは「たとえ」だといっています。「たとえ」だとして、何を何に例えているのでしょうか。そう問うてみると、私には、結局「婚宴」という言葉が、大きなものに見えてくるのです。今日の箇所の後半では、たんに「昼食や夕食の会」(一二節)として出て来ますが、これは比喩ではなく、そのままの言葉です。しかし「婚宴に招待されたら」という言葉は、やはりたとえ、比喩です。

簡単に言えば、婚宴は、神の国を、神の催す宴会、神の国の食卓を意味しているのです(マタイ二二、二五章、ルカ一三・二九、黙示一九・九他)。神の救いの喜びの宴です。そしてそこにあずかるのは、どういう人たちなのかというのが、じつは本当の問いなのです。

2 へりくだり

恥ずかしいことになるから、はじめから末席にいたらい、人間的には、なるほどその通りですけれど、もしその場が神の招きによる宴、神を主人(ホスト)とする神の国であるならば、そんな人間の知恵が通用しないであろうことは、いうまでもないことです。

そもそも、人間のだれが神の国にふさわしいというのでしょうか。そんな人はだれもいないのです。私どもは、神様に、引き上げられてもらって、つまり、高められてはじめて神の国に入ることが許されます。

高ぶる者、すなわち、ここではファリサイ派の人たちや律法学者のことです、我先に上座(かみぎ)を、上席を、いいのかな、なんて反省はこれっぽっちもなく、座ろうとする彼らは、低くされます。

むしろ低くされるのであって、入れないといっているではありません。神の国に入るのは神によって招かれた人だけです。神の恵によって「高められ」て、神との交わりに入れられる。そのことを、私どもが本当に知るなら、私どもは、自ずから、へ

りくだらざるをえない。フアリサイ派であろうと、彼が律法学者であろうと、だれであろうと、へりくだる者だけが、神の招きに相応しい人、神との交わりにあずかる人だ、それが前半の趣旨です。

へりくだり、謙遜とはどういうことであり、へりくだる者とは、どういう人を指すのでしょうか。ここでは、何より、上席を選んで座ろうとする、第一に自分の欲望を追求する人ではありません。ですからここでのフアリサイ派と正反対の人です。

しかし私ども、〈へりくだり〉ということで第一に思い起こさなければならぬのは、イエス・キリストです。有名な使徒パウロの言葉を、私ども改めて思い起こしたいと思います。

キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者となられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました（フィリピ二・六〜九）。

ここに、真のへりくだりが示されています。ここに真の謙遜があります。神が人となるということ、自らを空っぽにして、神のみこころに従うこと、最後まで従うこと、これが聖書のへりくだり、謙遜です。すでにルカはマリアに、「身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったことです」（一・四七）と歌った、イエスの母マリアにそれを見ていました。

へりくだりは、したがって、たんに自分の限界を知って謙遜になる、自己卑下ではなくて、まして人前で謙虚にしてれば、いいことがあるというのではなくて、第一に神との関係です。神の前に被造物としての自らの小ささを知り、神の恵によつてのみ生かされていることを知り、罪深い私どもをなお赦してくださいるその憐れみに信頼し、神の御心に従うこと、これがへりくだりです。

3 神の国の証し

さて今日の箇所の後半です。はじめに申しましたように、後半、一二節からは、話はイエスを招待した人に向けられます。

また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも呼んではならない。その人たちも、あなたを招いてお返しをするかも知れないからである。宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」（一二〜一四節）。

先ほど、今日の箇所の前半部分を取り上げたとき、ルカは、イエスは「たとえ」で

語ったのだと書いていて、もしそうなら、何より「婚宴」そのものが、一つのたとえであって、それは神の国を、神と人との喜ばしい交わりを指し示していると理解することが肝要だと申し上げました。

この後半について、ルカは、言葉としては、「たとえ」で語ったとはいっていませんが、「たとえ」として理解していいと思います。しかしここでその神の国を指し示しているのは、「昼食や夕食の会」という催し物ではなくて、「友人も、兄弟も、親類も、近所の金持ちも招かれず、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」が招かれるという、その内容です。それが、神の国を指し示す「たとえ」であるように思います。

招かれるのが、そうした人たちである理由が述べられています。その人たちは「お返しができない」人だからだと。お返しを期待して、メリットがあるから、だれかを食事に招待する、そんなこの世の常識が覆されています。まさにそこに、この食事に、神の国が映し出されている理由があるのです。

そこに神の国が映し出されているのだとすれば、神の国へと招いてくださる方は神であるに違いありません。実際、ここでイエスを「招いてくれた人」も、神のように招くことが勧められているのです。そのとき、この人も、終わりの日に報われることになります。

ここで神が、まさに招く方として暗示されているのだとすれば、神は私どもを、まさにお返しなど到底出来ない私どもを、ですから、それに値しない私どもを、まさに無償で、招いてくださったということです。ここでも使徒パウロの言葉を思い起こします。「神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです」（Ⅰコリ、一・二六以下）。神の選びがこのようであるからこそ私どもは招かれたのです。それゆえ私どもも、そのようして多くの人を神に、そして教会に招くのです。

むろん教会はそのまま神の国ではありません。しかし神の国を証しし、映し出すところであります。この教会において、私どもは、主イエスに、働なしに招かれて、その食卓に着くことを許されたことで、神の国を証しし、映し出すのです。

最後に、少し、皆さん、想像力を発揮していただきたいのですが、私どもがこの教会、会堂、一つ教室のようにも見えます。この内装の色も、オルガンの位置も、まさにそうです。いいなあと思って言っているのが、悪い意味でいっているのではありません。しかしこの会堂の中心にあるのは何でしょうか。それを改めて考えていただきたいのです。

中心にあるのは、聖餐式のためのテーブルです。パンを食し、ぶどう酒を飲むための食卓です。このテーブルを挟んで、こちら側と向こう側、私は皆さんと対面しているのではないのです。テーブルをこちらとそちらから囲んでいるのです。キリストの記念としてのパンとぶどう酒、その周りに私どもは集まっています。神の国がここに映し出されています。その食卓に私どもも着いています。そしてこの食卓に着く人がこれからも増し加えられることを望んでいます。条件はありません。すべての人に招きが語られているからです。お返しできない人を神は招いています。すべての人を招くことによって神の国を証ししてまいりましょう。